まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 78
2003.10

アングル
「まちなみ」と「いとなみ」～まちづくり型観光博覧会の目指すもの～
えひめ町並博2004 プロデューサー／宮本　倫明 …… 1
特集　『高齢者への視点でまちづくり』
「バンブー」めぐれ　笑顔つながれ　玉川町／森　松夫 …… 2
「あんき」の思い　ー死ぬる場所づくりー　松山市／中矢　暁美 …… 4
高齢者に移動の自由をータウンモビリティ実現に向けてー　伊予市／片岡　直人 …… 6
世代を超えた仲間づくり　北条市／仲尾　聖子 …… 8
ふれあいセンター「もやい」誕生に思う　津島町／山本　裕子 ……10
論談ーまちづくりー
高齢者が生き生きと暮らせる社会の構築に向けて
松山大学法学部　講師／甲斐　朋香 ……12
キラリ光るまち
「秋津野塾」の地域活動について　和歌山県田辺市／玉井　常貴 ……14
引き算型まちづくりの事始め（九）　内子町／岡田　文淑 ……16
トークナウ
ここにしかないものを売る　新宮村／平野　俊己 ……18
温故知新　内海村／寺岡　秀幸 ……19
ＭＹ　ＴＯＷＮうぉっちんぐ　歩キ目デス＆足ラテス
忽那七島鑓絵めぐり・中島町探訪記　岡崎　直司 ……20
媛のかわら版
あかがね（銅）の里から（その2）　新居浜市／前原　和子 ……22
研究員レポート
自立した上秋津の地域活動について　梅村　裕治 ……24
地域イベントと地域振興　奥山　清司 ……26
媛のくにフラッシュ ……28
information　センターからのお知らせ……29

特集
「高齢者への視点でまちづくり」

少子高齢化が世界最速のスピードで進行しているわが国にとって、高齢者の人間らしい暮らしに配慮した地域づくりが喫緊の課題となっています。

この問題の解決に向けては、介護や福祉を必要とする高齢者へのケアの充実はもちろんのこと、豊富な経験や知識・技能を有する高齢者の活用についても検討していくことが必要だと思います。

そこで、今回は、高齢者にフォーカスを当てて、地域づくりや社会参加の主体としての高齢者たちや、高齢者たちの暮らしを支援している方々に登場していただきました。

（編集子　山下）

表紙の言葉

雨が続き涼しい夏の幕開けは、秋の野菜不足、果実の甘み不足、稲は不作と農家に厳しい収穫の秋となった。

年老いて山や畑を守るには限界がある。果樹園を解放し、都心の人に一日、自然を味わってもらい、腹一杯、満足して帰るお客さん。

交流が深まり、こうした農家も意欲的になり、家族、仲間で自然とのふれあい、体験学習を重ね、農家の厳しさを心に残して欲しい。

久万町・観光農園

柳原あや子

「まちなみ」と「いとなみ」

～まちづくり型観光博覧会の目指すもの～

えひめ町並博２００４ プロデューサー
宮本倫明

「観光は21世紀のリーディング産業」「二〇〇三年は訪日ツーリズム元年」など、最近、観光を取りまく掛け声は、威勢のいいものが多く、「観光」は新たな景気浮揚に対する期待の一翼を担っているように見受けられます。確かに多くの国で観光関連市場の成長率は、GDPのそれを上回っているので、マクロでみると根拠のないスローガンではないようです。また、国内でも多くの地域で「観光振興」に対する重要性が叫ばれています。しかし、旧来の「観光産業」が旧態のままでその波に乗れるかというと、答えは明白に「NO！」だと感じます。

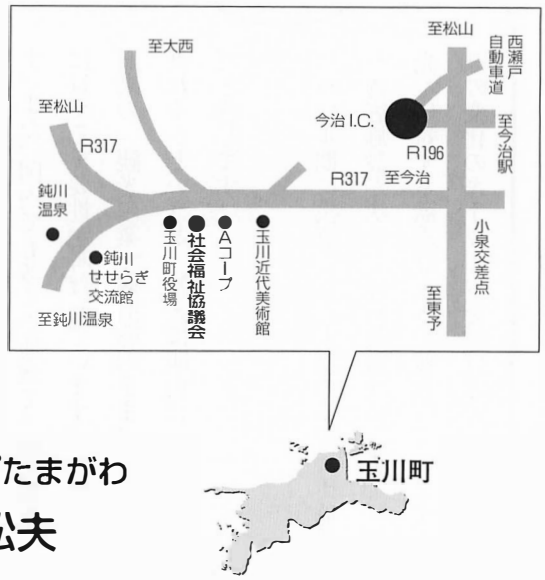
バブル期に投資された大型のレジャー施設や誘客施設が次々と経営破綻する一方で、「観光」に対する欲求は大きく変化しています。その変化のキーワードを挙げるだけでも「体験重視の観光」「時間消費の観光」「テーマ追及の観光」「小グループ観光」「地元の人・暮らしとのふれあい」などなど次々に言葉が浮かびます。地域行政の現場においても「観光課」から「観光交流課」など視点を広げようとする動きも見られます。これからの観光や交流の資源や目的はいったいどのようなモノになるのでしょうか？

来年、四月二十九日～十月三十一日までの半年間にわたり大洲・内子・宇和を中心に南予一円で観光振興イベント「えひめ町並博２００４」を開催します。昭和の町並を再現する「大洲レトロタウン」、内子座で華やかなイベントを繰りひろげる「内子座芸能撰集」、宇和ではシーボルトの娘おイネさんをテーマに江戸文化、ヨーロッパ文化を織り交ぜたアンティークのお店が並ぶ「おイネの散歩道」を展開する予定です。秋には大洲城天守閣もオープンし、肱川の川下りなども計画中です。

大洲・内子・宇和以外でも各市町村で座談会を延べ六十回近く開催し、これを機に地元の資源や特徴を再発見し、広くアピールをしていこうとする活動を昨年から続けています。来年のイベント開催時以降も成果が残っていくように、地元に暮らす方々のまちづくりの活動や新しい事業を観光・交流の資源として持続的に成長させていこうとする取り組みです。

「まちなみ」には「景観」だけでなく「暮らし」「物語」が溢れています。人々はそこに、古い建物の空間的な連なりだけではなく、その奥に営々と続いている人々の「いとなみ」の連なりを見るのではないでしょうか。見るもの、食べもの、体験、お土産にいたるまで、その土地ならではの「暮らし」「物語」が感じられるさまざまな「おもてなしのプログラム」をじっくり練り上げて行きたいと思います。

「バンブー」めぐれ 笑顔つながれ



玉川町
ボランティアグループたまがわ
会長　森　松夫

一つの体験から

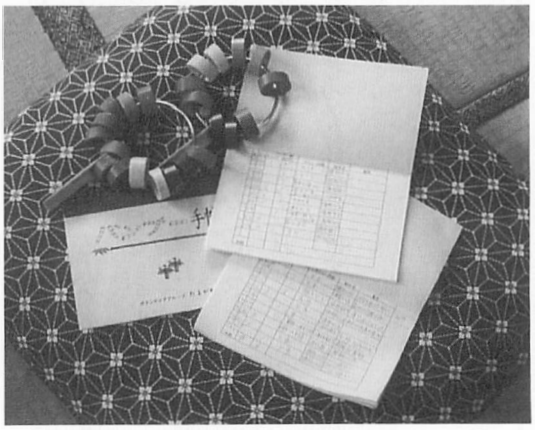
私の住む玉川町は、今治と松山の両市に挟まれた山間部にあり、人口六千人の約三割の高齢者が暮らす過疎の町である。数年前、こんな体験をした。「帰るところなら乗せて帰って。」と老婦人に声をかけられ、気安く自宅まで送って行った。この老婦人は「通院のため町に出てきて買い物をして、バスの待ち時間が一時間余りもあるし、体も悪くて・・」と恐縮しながら車中で話していた。

自宅に着くと、礼を言って私のポケットに無理やり現金を押し込んで降りてしまった。

急いで追いかけ、これは受け取れないと突き返して帰宅したのだが、翌日の夕方お礼の品物が家に届いていたのである。それは、老婦人が、わざわざお礼の品物を買うために町へバスで出かけ、帰りに途中下車して私の家に届けてくれたに違いなかった。

はじめは、特別律儀な老婦人の問題と考えたが、高齢者が多く、交通の便も悪いこの地域で暮らすための術であることに気づき愕然となった。

「地域は、このままでは駄目になる。」という危機感から、住み慣れた自分たちの地域を守ろうと、いろいろ模索しているうちに、三年が経過していた丁度その頃、地域通貨のことを知ったのである。地域住民が助け合い、支え合うきっかけ作りに地域通貨を導入しようと、ボランティアグループたまがわを五人で立ち上げた。



「バンブー」と手帳

始めるために

私たち中核メンバーは、活動の基本理念の確認や地域通貨の発行などの議論と試作を繰り返すうち、地域の野山を占領する勢いの竹にあやかって『バンブー』（竹製の地域通貨）を誕生させた。また、先進地のサポーターを招いて講習会を開くなどする中に会員も増えてきた。

特集　高齢者への視点でまちづくり

お灸の据え合い

会員でできることは会員で作ろうと『バンブー』の手づくりを高齢の会員が始めた。この高齢の会員に、采配を振るってもらいながら、みんなで『バンブー』を手づくりした。

この準備段階で、特に、平成十三年度の地域通貨活用モデル事業実施団体の県指定を受けていて非常に助かった。

『バンブー』の仕組み

この仕組みは、会員同士のボランティア活動（サービス）を『バンブー』に置き換え、それを互いにやり取りするシステムである。なお、三十分のサービスをその内容に関係なしに、『バンブー』一個に置き換えて、一『バンブー』と決めている。

つまり、三十分のサービスを提供した人が、受けた人から一『バンブー』をもらい、受けた人がまた、別のサービスを提供して『バンブー』を受け取る仕組みである。また、会員数は約四十人で、サービス内容はおよそ百以上もある。

遠慮や気兼ねをすることなくお互いにしたりされたり、できる時にできることをして支え合う地域づくりを目指しているものである。

現況と課題

車での送迎やついでの買い物は、高齢会員の利用内容となり、また、包丁研ぎやモーニングコールは、提供内容となっていて、『バンブー』の流通がかなりある。

ほとんどの会員が高齢者である畑寺地区では、隣近所の会員達が集会所や会員の家に集まり、お灸の据え合いが盛んになり、『バンブー』の流通が活発である。会員は「やいとを据えてもらって、おしゃべりも楽しめて、『バンブー』の交換できる。」と喜んでいる。

また、サイコロ作業所でも、施設利用者やその家族が加入しており、「『バンブー』をやり取りする中で、地域との関係が深まった。」と喜んでいる。

しかし、地域通貨導入から二年になるが、会員数は当初と余り変わらず、さらに『バンブー』の動きも低迷している現状にある。

この『バンブー』が地域全体に普及しにくい背景の一つは、地区毎の会員数に偏りがあること。また、会員の年齢構成も六十代が圧倒的に多いので、世代を超えた普及を今後の課題にしたい。

その他にも、地域住民が多く集まるイベントの場で、模擬的に『バンブー』に触れてもらう試みを繰り返し行いたい。

また、『バンブー』の会員だけの毎月の定例会や『バンブー』通信等も地域に開く方向で、工夫改善を図りながら、この活動を活性化していきたい。

和気あいあいの話し合い

「あんき」の思い

—死ぬる場所づくり—

松山市
託老所あんき
代表　中矢　暁美

立ち上げの思い

もともと看護婦だった私は、十五年ほど前からヘルパーとして働いていました。そんなある日、特養を訪れた際に初めて「機械浴」を目にし、激しいショックを受けました。

「大きな施設にも利点はあるが、一人一人にあわせたきめ細かいケアは、少人数でないと難しいのではないだろうか。」

「住み慣れた地域で、死ぬる場所を作りたい。」

平成九年に託老所「あんき」を立ち上げたのは、そんな思いからでした。

「あんき」の風景

古い民家がぎっしり立ち並ぶ一角。車一台がやっと通れる道。何年も空き家だった築百十年の大きな木造の家。小さな手作りの看板がなければ、誰もそこが託老所だとは気づきません。

中に入れば土間、畳部屋に、床の間。そこにあるさまざまな調度品も使い古されたものばかりで、昔にタイムスリップしたかのような懐かしさの漂う風景。

お年寄りたちが自分の家にいるのと同じようにくつろぎながら、思い思いのときを過ごしています。

あんきの目指すもの

どんなお年寄りも、当たり前に、自分らしく、普通の生活を続けられる場所。そして、「自分もここに入りたい」「ここなら死ねる」という場所。そういう場所であることを、託老所「あんき」は目指しています。その人がその人らしく暮らす。たとえ痴呆性高齢者であっても、住み慣れた地域で、地域の中の一人として当たり前に暮らすということを模索しながら、痴呆性高齢者のケアーを考え、訴えている行動を介護者が早く察知し、送り続けている大きなメッセージを私たちがどれだけ理解し、心に寄り添うことができるかがこれからの高齢者福祉ではないかと思っています。

築110年のあんきの建物

特集　高齢者への視点でまちづくり

関係づくり・場づくり

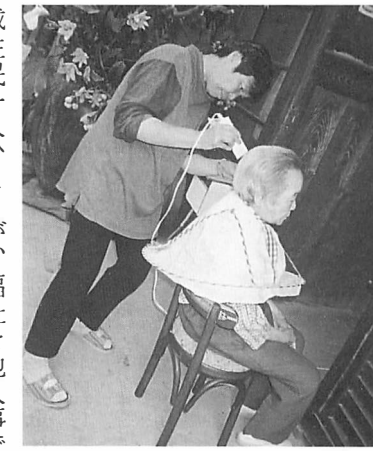
そのためには、一人一人をよく知り、その家族をも含めて生活の自立を目指した関係づくりこそ、介護の基本理念であると考えています。高齢者一人一人を支えるには、家族と介護者と地域が連携していくことが不可欠だと思います。

そこで、託老所「あんき」の試みとして、地域通貨を活用しながら近隣の助け合いや世代間の交流を図っていますが、痴呆性高齢者や障害者の方々と触れ合う中で、人と人が、人と人としてお互いを認め合い、尊敬し合う人間関係が生まれてきます。その関係づくりこそ地域福祉そのものではないでしょうか。

そのような地域をつくるためには、地域住民一人ひとりが、福祉を他人事ではなく自分の事として考え、思いやることが大切だと思います。

手づくりのおやつづくり

また、「あんき」では、今年四月に開設したグループホーム「こんまいあんき」を活用し、要介護認定を受けていない元気老人や子供たち、また地域の方々の集まれる場所づくりを目的に、縁台のある昔ながらの小店を媒介としたコミュニティの場づくりを目指しています。地域に密着し根付いていくためには、グループホームに入居している方が地域住民との関わりをいかに多く持つか、また持てるかが大切なことだと思います。


家族の一員のように散髪

生活の延長線上の介護

老人福祉の考え方として、その人が生活してきた環境や日常生活の延長線上に介護がなされなければならないと思います。今、私たちの周りではどうでしょうか？介護される方が自分の福祉を選ぶのではなく、ともすれば家族の立場で福祉を選んでいるため、本当に高齢者にとって安心して生活ができる空間であって欲しいと思います。

課題の解決に向けて

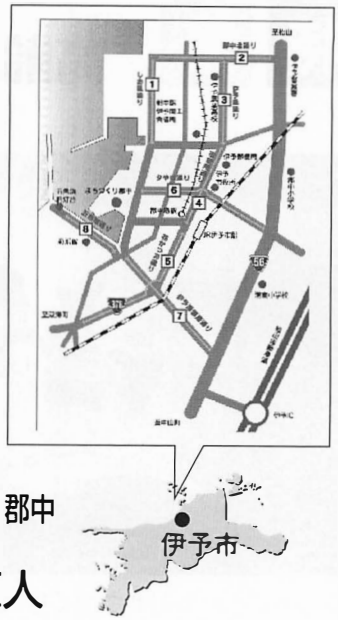
今私たちが大きな課題として取り組まなければならないことは、一人一人が一人一人を尊重し、幸せに生きられることを地域住民がいかにサポートできるか。また、いかにボランティア活動の推進につなげていけるような生涯学習を行っていくかだと思います。そして、住民一人一人がこの課題の解決に向けて、行政と一緒になって考えていかなければならないと考えています。

美しい花を見てストレス解消

高齢者に移動の自由を

―タウンモビリティ実現に向けて―

伊予市
伊予市TMO・第3セクター㈱まちづくり郡中
取締役
ソフト事業部会長　片岡　直人



超高齢社会を前提としたまちづくり

伊予市TMO・第3セクター㈱まちづくり郡中は、伊予市中心市街地活性化のために平成十三年九月に設立された半官半民の株式会社です。伊予市の中心市街地は、他の地方都市同様、中心部の空洞化が深刻です。商店街の衰退がそのことを象徴しています。大型店の進出、車社会への対応の遅れ、後継者難等、商店街を取り巻く環境には厳しいものがあります。

車社会に適応できる人にとっては、大型店は便利であり、商店街などなくても困りません。しかし、わが国も、伊予市も既に「高齢社会」に突入しています。伊予市の高齢化率（六十五歳以上の人が人口に占める比率）は二十％を超えています。この比率は、これからも上昇を続け、将来は三十％、四十％になると予想されます。「超高齢社会」の到来です。

高齢化率の上昇に比例する形で車社会に対応しきれない人の比率も上昇します（年少者のことも忘れてはなりません）。超高齢社会を前提としたまちづくりが必要です。

タウンモビリティの意義

タウンモビリティとは、一人乗り伝導カート貸出事業のことです。高齢者や歩行困難な方に電動（四輪）カートを貸し出すことにより、中心市街地での「足」となることが期待されます。一人乗り電動カートは、法律上「歩行者」として扱われます。僅かな練習で、高齢者でも自由に操縦できるようになります。

当初、タウンモビリティの具体的イメージが湧きませんでした。そこで、まちづくり郡中が主催する「まちづくり講座（全六回）」の講演の一つを「タウンモビリティ事業について」とし、タウンモビリティ普及に尽力されている白石正明氏をお招きしました。白石氏のお話は具体的かつ興味深いものであり、聴講した多くの人が感銘を受けました。

さらに、先進地である広島市佐伯区楽々園のショッピングセンター内にある「らくらくえんオフィス」を訪ねました。責任者の熊谷憲二氏から「タウンモビリティはソフト事業である」ということを懇々と説明していただきました。各地の事例を見ると、電動カートを買っただけで、ほとんど活用されていないケースも多いようです。電動カートで回遊する範囲内を事前に徹底的に調査すること、その範囲内に「ひやり」とするような危険箇所はないかを探り出し「ひやりマップ」

特集　高齢者への視点でまちづくり

を作成する必要があること、ボランティアの支援体制が必要であることが理解できました。

ボランティア団体設立と「街の交流拠点」

ボランティアによる支援体制をつくる必要性を痛感した私たちは、学校関係者や広報区長さんたちをはじめ、各種団体のご協力を得て、ボランティア組織づくりに着手しました。準備会を重ね、昨年十月、「タウンモビリティをみんなの手で市民推進協議会」が設立されました。まちづくり郡中は事務局を努めています。

「協議会」では中心市街地を電動カートの目線で探索し、「ひやりマップ」づくりのための現地調査を行い、試乗会を開催するなどの活動を行ってきました。募金活動も行い、イベント時の街頭募金等で数十万円の貴重な資金をいただきました。伊予ロータリークラブ、伊予市商業協同組合から電動カート寄贈の約束もいただいております。

電動カートの試乗会

来春、「TMO構想」の柱である「街の交流拠点」がJR伊予市駅前に完成します。街の交流拠点は、起業者育成のためのテナント施設、伊予市の産品を扱う物産コーナー等を有する伊予市中心市街地活性化のための拠点施設です。タウンモビリティの拠点施設としても予定されており、ここでタウンモビリティ事業を開始する予定です。

問題点と今後の展望

タウンモビリティ実施に当たっての懸念事項として、我々がメインストリートであること考えている灘町の通りが歩行者（電動カート）にとって危険ではないかということが挙げられます。旧国道である灘町の通りは、歩道がなく、しかも道路幅が狭い上に、通り抜け車両が多数通過し、歩行者が安心して歩けません。車の排除、一方通行、車の速度が出せない道路構造（車道の蛇行、スピード抑制のための段差等）の採用などが対策として考えられます。しかし、反対も予想されるところです。

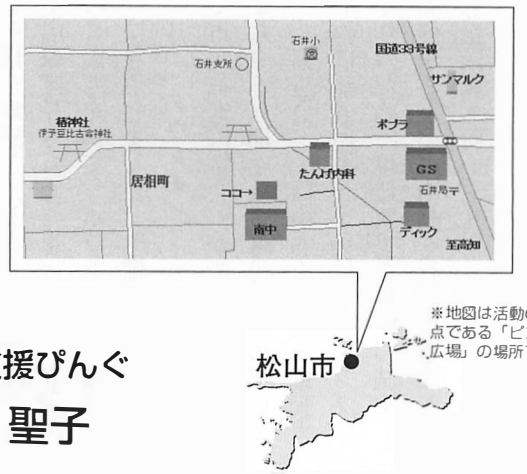
より現実的な方法として、電動カートの運転に不慣れな方にはボランティアの補助者が付き添い、安全に十分配慮したうえで実施すること、灘町の通りが歩行者優先の道路であることをドライバーに理解していただき、車と歩行者（電動カート）とが共存できる仕組みを創っていくことを考えています。

超高齢社会を見据えた我々の取り組みは、まだ準備段階に過ぎません。超高齢社会では歩いて暮らせる、バリアフリーの都市構造をつくり、その中で、歩行困難な方のための移動手段を確保することが重要な課題となります。タウンモビリティ実現というテーマを追求する中で、高齢者のニーズに対応したまちづくり、市民全体に必要とされる地域コミュニティの核となる中心市街地づくりを進めていきたいと考えています。

「タウンモビリティをみんなの手で市民推進協議会」設立総会（平成14年10月12日）

世代を超えた仲間づくり

北条市
NPOパソコン活用支援ぴんぐ
代表理事　仲尾　聖子



※地図は活動の拠点である「ピング広場」の場所です。

はじめに

「高齢者・シニア」といえば、「介護・寝たきり」そんな暗いイメージを思い浮かべていませんか？「じゃあ、趣味や関心のあることってなんだろう？」、「演歌？時代劇？」ひとくくりにしてしまいがちな世代ですが、これは大変失礼な話で、実際には、六十代～九十歳以上と幅広く、生きてきた環境、経験、みんな違います。正しくは「熟年者」と呼ぶべきではないのでしょうか？三十代の私が生意気に、こんな事を考えるようになったのは、「パソコン」をきっかけに仲間と活動をしているからかも知れません。

ぴんぐとは

急速に発展する情報化社会、私達はITを使える人とそうでない人の格差が広がってきている事に問題意識をもち、格差を埋めるための支援をしていこうと発足しました。ぴんぐでは、現在、さまざまな支援活動を行っています。

■IT講習後のフォロー講習
「パソコンをもっと使えるようになろう講座」参加者六十名
■「コンピュータおばあちゃんの会」
大川加世子さん講演会
「パソコンは未来のパートナー」参加者二百十六名
■コムズフェスティバル
「シニアの為のネットワークづくり・パート2」
「趣味からはじまるインターネット」
参加者五十六名
■情報リテラシーセミナー
「パソコンのこれだけは知っておこう講座」参加者九十二名

ぴんぐの催しには、いつも幅広い年代の方から問合せを頂きます。中でも、熟年者達の、毎回、何かを得ようとするパワーや、パソコンに関する興味深さや関心の高さを実感することは、私達の活動の原動力になっています。

また、ぴんぐのスタッフは「パソコン」をキーワードに、二十代から六十代と幅広い年齢層で構成されています。利害関係のない同じ思いをもった「仲間」でいることは、素直に相手の心の広さや、温かさに気づく事ができ、年を重ねてきてからこそ見えてくるもの、感じる事があるのだと窺い知ることができます。

エピソード1

今年の二月に、コムズフェスティバルが行われ、昨年の夏から実行委員として

特集　高齢者への視点でまちづくり

コムズフェスティバル

「いきいきシニア21」、「おもとの会」の熟年者グループのメンバーと共に分科会を企画・運営してきました。パソコン初心者にもインターネットを楽しんでもらおうと、試行錯誤しながら役割分担を決め、私はホームページを担当しました。内容は趣味を「エンターテイメント・ゲーム・創作・レジャー・ガーデニング」に分けて紹介するというホームページです。私はイラストを載せるにあたって、レジャーでは、おじいちゃん、おばあちゃんが旅行しているイラスト、ゲームでは孫とおじいちゃんがカルタをしているイラスト、各分野とも同様に作成していきました。

しかし、後日行われた部会で私は「はっ！」としたのです。ポスターやチラシには「おじいちゃん、おばあちゃん」のイラストはありません。私は「シニア」対象のイベントだから、当然「白髪頭」や「シワ」を強調したイラストを使うものだと思っていたのです。そんな私を察してか、「わしらの会で、以前チラシに、『爺さん婆さん』の絵を使ったら、会のおねえさん達にえらい怒られてのぉ」と笑い話をしてくれました。

エピソード2

ぴんぐ主催の講演会に東京から来松してくださった大川加世子さん（七十二歳）とは、今もメル友なのですが、以前お話をした時に「日本老年看護学会で『むすんでひらいてをさせないで』という講演をさせてもらったのよ、意味わかるかしら？」と尋ねられました。私のまわりの、熟年者達は、将来寝たきりにならない為に、健康に気をつけたり、また自ら「ボケ防止」と言って、パソコンを習ったり、何事にも前向きで意欲的です。確かにパソコンは一つずつ、確実に、自分で納得しながら進んでいくため、何度も繰り返しながら習得しています。ゆっくり進んでいるように見えるからといって、集えば園児と同様お遊戯をさせたり、童謡を歌わされたり。また、脳梗塞で倒れて、大変なリハビリを乗り越えてやっと歩けるようになった時に、手を叩いて「えらい、えらい」とまるで幼児がはじめて歩行できた時と同じような扱いを受ける事があるというのは、熟年者をよく見ていない人達の、単なる自己満足に過ぎない行為なのかも知れません。

最後に

一般に言う「高齢者・シニア」に対して、外から見るのと中から見るのとでは、ギャップがありすぎる事に、まだ気がついていない人が多いのではないでしょうか？波乱万丈の人生を生き抜き、困難を乗り越えて現在を迎えた方々の経験や奥深い知恵は、いくつもある引き出しの中で醸されているようです。控えめな態度を美徳としてきた世代だからこそ、実働部隊となって主張し、動くのは私達であり、彼らは頼もしい存在として私達を見守り、常に支えてくれています。そんな素敵な仲間に私はいつも感謝しています。

実行委員

ふれあいセンター「もやい」誕生に思う

津島町
社団法人津島町社会福祉協議会
山本　裕子

今年六月二十四日、津島町の中心部、岩松商店街に「ふれあいセンター『もやい』」がオープンしました。

「もやい」は平成十三年度に津島町社会福祉協議会が津島町の岩松地区をモデル指定して実施した「地域福祉リポーター事業」をきっかけに、地域住民と社協が協働して作り上げた地域の「たまり場」です。

誕生までのあしどり

我が町もご多分に漏れず少子高齢化が進み、高齢化率が二十八％を越えました。町の中心部の商店街とはいっても、一昔前の賑わいはなく、空き店舗が目立ちます。一歩路地を入れば独居高齢者が多い地区でもあります。そんな地区でリポーター（十名）が拾った声は、「ひとり暮らしが心配」とか「生活支援サービスに関すること」など課題数にして百六十八に昇りました。そして、その後リポーターや民生委員等の地域の方々と共にその課題解決方法について「自分達にできること」など、まちづくり応援団の前田眞先生（㈲邑都計画研究所）の力をお借りしながら幾度も話し合いを重ねました。その結果見えてきたのが、「誰もが気軽にいつでも集える拠点があり、地域住民がもっとつながりを深めることができれば解決できる課題がたくさんある。」ということでした。そこで、住民のたまり場づくりを考えるワーキンググループを結成し、実現に向け試行錯誤・・・。やっと今年度、社協に寄せられた寄付金を活かして空き店舗を改修、運営を住民の皆さんが担う形で「もやい」は誕生の運びとなりました。

もやいでの活動と担い手

もやいでは、特別なイベントなどはありません。フラ～っと立ち寄り、お茶を飲みながら雑談をする人がいれば、その横でおばあちゃんと子どもが百人一首をしていたり、おじいちゃんが将棋をさしていたり、それぞれが気の向くままにやって来て、思い思いに「もやい」での時間を過ごし、帰ってゆく。これが基本のスタイルです。

そして、そこに最近少しずつ特別な時間が作られるようになりました。その特別な時間には、まずミニデイサービスがあります。そもそも八年程前から民生委員さんが近隣の独居高齢者に「たまにはみんなで話そうや、お昼でも一緒に食べんかな」と声を掛け年三回程度集会所において開催していたものですが、もやい

特集　高齢者への視点でまちづくり

ができてからは毎月開催されるようになりました。食事の後は、懐かしのメロディーを心ゆくまで歌ったり、お話に花を咲かせたり、七月には子供達などご近所を巻き込んで七夕飾りを作って、もやいに飾りました。笹飾りをよく見みると「元気で長生きできますように」と書かれた短冊の横に「サッカー選手になれますように」・「彼女ができますように」といった短冊も並び、もやいに寄る人達の心を和ませてくれていました。

他にも、囲碁やお花、手話を教えてもらえる日などもあります。先生はすべて地元の方で、得意技を活かしながら地域の方々に喜ばれています。また、もやいにはそこに集う方々の思いがこもった物がたくさんあります。看板、のれん、床カーペットに始まって壁に掛かっている絵や手すりなどなど。気が付いた人が、できるように手作りし、もやいを自分達（地域）に馴染むように作り上げて行っているのです。

このようなことを振り返ってみる時、様々なことに気付き、活動を担って下さっているのは主に高齢者の方々であることに気付きます。地域福祉リポーター事業でもインタビューに応えてくださった方々の約六十パーセントが高齢者でした。

「一人暮らしで病気の時や風雨の時に不安を感じる。」「身体が不自由な為介護してくれるご主人がいなくなった時が心配。」「大きなゴミを出す時や重い買い物を手助けして欲しい。」など。

ひょっとしたら、インタビューに応えて下さった方々の中には、自分達の出した意見がどのように活かされ、町（行政）がどのように変えてくれるのだろうと期待をもっておられた方もいるのではないかと思いますが、いつの間にか自分達もじっとしていられなくなっているのかもしれません。

地縁で繋がる「拡大家族」に

もやいに関わる人たちは、実にイキイキとされています。そんな方々がもやいに関わることによって、もやいは人と触れ合うことの楽しさと共に人の役に立つことの喜びを感じられる場所になっていると思います。そういった拠点が町の中心部にあり、日常の中で次の時代を担う者達が自然にその活動を目にし、時には共に過ごしながら、人生の先輩の生き様に学ぶ場になっていることを考えると、もやいは無限の可能性を秘めているように思います。

もやいは高齢者だけの拠点ではありませんが、高齢者を中心に地縁で繋がる『拡大家族』に、地域がなれることを夢みています。

台風が来た時に海岸部で入り江などに船を避難させ、船と船をつなぎ合わせる為に使う舫（もやい）綱をイメージして「もやい」と名付けました。津島の中心部で心と心をつなぎ、一人ではないことの安心や、やすらぎを感じ取れる拠点になれるよう、みんなで大切に育てて行きたいと考えています。

津島町へお越しの際は、是非お立ち寄り下さい。

ミニディサービスで懐かしのメロディーを唄う皆さん

論談 ―まちづくり―

高齢者が生き生きと暮らせる社会の構築に向けて

松山大学法学部講師
甲斐 朋香

「〇〇ちゃんの帯の結び方はおとなしかねぇ、口紅ももうちっと派手にすれば良かとに」「いいと、私はこれで」―ウン十年来の幼友達同士で会話が元気に弾んでいる。大学院生時代、博多のまちづくりを学ぶからには、一度は昔ながらのどんたくも経験せないかんちゃない？と誘われて飛び入りした「大浜校区どんたく隊」の平均年齢は八〇歳前後（当時）。初夏の陽射しの下、揃いの着物に身を固め、三味線や杓文字を打ち鳴らして、町内を丸二日間休みなしに練り歩く。訪問先には病院や老人ホームも含まれており、入院患者や入所者の方々にとっては、楽しみな恒例行事として定着していたようだ。

ここ松山には着任して二年あまり経つ。まちなかで見かけるお年寄りの表情の穏やかさは、来た当初から印象的だった。それぞれのまちで豊かな「老い」の風景を見る度に、私の父母にも将来あんなふうに生き生きと過ごしてほしいと思う。今年度より「高齢化社会に対応した魅力的で活力あるまちづくり」に関する検討会に参加している。この会議は、松山市商工会議所の中に設けられた地域開発委員会の作業部会に当たる。座長の前田眞先生（邑都計画研究所）を筆頭に、いずれも一家言をお持ちのメンバーと、具体的な事業化をも視野に入れつつ議論が進められているが、以下の記述は筆者の個人的な意見であることをお断りしておく。

●イマドキの高齢者は元気

ここ数年間に政府が公表した諸々の資料から浮かび上がるのは、現役世代に匹敵する経済力や、国際的に見ても高い労働意欲、各種文化活動やボランティア活動への強い関心を持つ「自立した」高齢者像である。もちろん心身の衰えに伴って必要となるサポートは惜しむべきでないが、「高齢者＝弱者」とひと括りにしてしまうと、却って高齢者の暮らしの豊かさを損なう恐れもある。今後の労働人口の減少も考えると、高齢者の能力や知識・経験を社会の中で活かすことは、社会全体にとっても大きなプラスとなる。

●人の役に立つ喜びを

わが国の高齢者に見られる就労意欲の高さは、主として経済上の理由によるものであるが、年齢が高まると、健康や生きがいのために働く傾向も強まってくる（『厚生労働白書』平成十三年度版）。六十～六十四歳で七一％、六十五～六十九歳で五七％がボランティアへの参加意欲を示しているという調査結果（内閣府「国民生活選好度調査」二〇〇〇年）とも合

わせて、社会の役に立ちたいと願う高齢者の思いが読み取れる。特に六十歳以上の世代においては、社会奉仕活動の参加率は男性が女性のそれを上回っており、退職後に自由時間を持った男性にとって、ボランティア活動が社会参加の一形態として重要な意味を持つことがわかる（総務省統計局「社会生活基本調査」）。

●活力源は地縁十志縁にあり

人とのつながり、とりわけ異世代間の交流は、高齢者の活力源として重要である。博多の例にも見られるように、伝統的な地域の絆が保たれている場合は、隣近所のおつきあいが高齢者の元気を往々にして支えている。「高齢者の各種サークル・団体への参加状況」で最も多いのは、町内会や自治会への参加である（内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」一九九八年）が、一方ではこうした従来型の地域社会活動に閉塞感を感じる者も多い。

今後は地域の枠組みを越えて、共通の趣味や関心を持つ者同士のつながり＝「志縁」をより重視する傾向が強まると考えられている。地縁と志縁とを有機的に結びつけ、人々の生活の場である地域社会をより豊かなものとするための方策が求められよう。

●高齢者と地域社会とを取り結ぶネットワークづくりを

他方、今後その社会的役割が高まると期待されるＮＰＯに目を向けると、その多くが関連する専門領域に詳しい人材の不足に悩んでいる（『国民生活白書』平成十二年度版）。高齢者がその人生の中で培ってきた技能を社会で活かせるよう、市民活動団体などとマッチングさせるしくみがあれば、高齢者の生きがいづくりと同時に市民社会の質の向上にも役立つ。場合によってはコミュニティ・ビジネスにつながる可能性もあり、高齢者の雇用創出も期待できる。

その意欲を持ちながら、実際にはボランティアに参加していない者の多くは、時間的制約と情報不足・仲間の不在をその理由に挙げている。そこで、例えば企業と市民活動団体などが合同で退職（予定）者との「お見合いパーティー」を開いてはどうだろう？最近は、退職後の人生を応援するため、従業員の稽古事や資格取得に補助金を出す企業もある。退職者向けのケアの一環として社会活動への参加促進策を採り入れれば、企業イメージの向上にもつながる筈だ。

また、大学などの高等教育機関の役割にも触れておきたい。地域の生涯学習機関として一定の役割を果たしているところもあるが、今後は一歩進んで、そこに集まる高い意欲と相応の知識・能力を持った高齢者と地域社会を結ぶネットワークとして機能しても良いのではないか。その専門知識を活かして地域社会の実態をきめ細かく把握することも、無論、重要な役割となろう。

キラリ☆光るまち

～和歌山県田辺市～

「秋津野塾」の地域活動について

和歌山県田辺市
玉井　常貴

「秋津野塾」の活動地域である上秋津は、和歌山県田辺市のほぼ中央に位置し、年間の平均気温十六・五℃前後、降水量は一六五〇㎜と温暖で、この条件を生かした果樹栽培が盛んである。主に山稜地を利用した温州みかんをはじめ多種多様な柑橘類、また平地の水田転作地には梅等を中心に落葉果樹を栽培している。みかん栽培は昭和三十年代、増産を図り、果樹経営は順調に発展して、昭和四十年代にはいると、みかんの価格暴落、生産調整の実施などにより、果樹経営、地域存続の岐路に立たされたが、青年農業者たちが柑橘の優良品種導入に取り組み、地域農業は以前にも増して発展してきた。

これらの取り組みを通して、地域の結束はさらに強まるとともに、むらづくりの気運も高まり、後継者育成、生産・生活基盤の整備、地区内外のいろいろなむらづくりの取り組みを実施してきた。特にこれらの活動は、町内会あるいは各種の取り組みに応じて、そのつど組織していたが、地区全住民の幅広い合意形成を図りながら、より一層活発なむらづくり活動を展開するためには、全組織を網羅するむらづくり組織が必要との認識が高まり、平成六年九月に、当時組織されていた二十二団体が集まり、「秋津野塾」を結成。地区一体となった活動を展開している。

一方、財政面では、昭和三十二年に発足した社団法人上秋津愛郷会が多方面への財政支援で、むらづくり活動に大きな役割を果たしてきた。

これら秋津野塾の各種取り組みが高く評価され、平成八年度農林水産祭「むらづくり部門」において天皇杯を受賞。むらづくりの取り組みに、より一層の励みとなった。

秋津野塾の現在の活動

設立主旨である「活動とうるおいのある郷土づくり」を推進し、都会にはない香り高い農村文化社会の実現を目標に、次のような活動を行っている。

①年間の行事

・花まつり（三月下旬～四月上旬）

秋津野塾参加団体の子供会の発案で、お年寄りと子どもの交流の場として、花まつりが開催され今年で第五回目を迎える。

・講演会（二月）

例年地域の状況等を検討しながら内容を決定し開催。

・夏まつり（八月）

伝統の盆踊りをもとにしながら、夏まつりを開催。特に子供達の参加は、貴重な三世代交流の場であり、新居住者たちとの交流の場ともなっている。

・高尾山登山マラソン（十二月）
　田辺市のシンボル高尾山（標高六百六m）を再発見、また、ミカンのピーアールを目的に、ミカン畑の中を駆け上る登山マラソン。今年で第十一回目を迎える。
・人文字ライトアップ（八月、年末）
　毎年、お盆、年末の二回高尾山での〝人文字ライトアップ〟を実施。明治時代の大水害で、高尾山に崖崩れが起こり、人文字型のハゲができていた。この崖崩れは、長い間田辺市民に災害への警告とともに、高尾山の象徴として親しまれてきたが、上秋津を考える会が中心となり、現在はないこのハゲを復活させようと人文字を灯らせている。帰郷した人たちにも親しまれている。

②いきいき健康増進
　高齢化社会に対応し、寝たきり老人をつくらないとの目的で開催。健康相談、公民館のサークル等の協力で生涯学習や、子どもたちの交流、レクレーション等も取り入れ、月二回開催。

③上秋津自主防災会
　阪神・淡路大震災の教訓から「自分たちの地域は、自分たちで守る」を合い言葉に平成十一年一月に発足。消防団のOBが中心となって組織され、災害への警告を促すため、半鐘の設置、各地域に住民総意で一次避難場所の指定等ソフト面での活動を中心に行っている。

④文化、歴史の継承
　平成九年五月、昭和六年に発掘され、東京国立博物館に寄贈した出土品を里帰りさせ、「ふるさと上秋津高尾山経塚展」を開催。また、文化や歴史の語り部を養成するため、「ふるさと部会」を設置。

⑤農業体験学習
　農業の実体を子供達に知ってもらうために実施。小学校の総合学習の中で学校と一緒になって、JA青年部、老人会、公民館などの協力をえて、年間を通して農業体験学習を行っている。

秋津野の産品

　平成十一年度の南紀熊野体験博をきっかけに、秋津野直売所「きてら」を開設。秋津野塾は営利団体ではないので、有志三十一名が出資して設立。出資者は、農家の他、商業、サラリーマンと多岐に渡る。地域住民であれば誰でも出品できるシステムになっている。上秋津の特徴である年間を通して収穫される「みかん」をアピールしながら、年三回（春、夏、冬）の「きてら詰め合わせセット」をふるさと発信しようと販売。消費者に少しずつ浸透し、現在では「きてら」の経営基盤を支えている。また、このセットの中に、秋津野塾の行事・活動等を記事にした「きてら通信」という機関誌を発行し、情報発信している。平成十五年四月に店舗を新設した。

現在の秋津野塾の課題

　平成八年天皇杯受賞後も秋津野塾は様々な活動を展開してきた。しかし、受賞後の全国からの視察あるいは農水省、和歌山大学経済学部の現地調査を契機に、秋津野塾の活動のあり方や方向性にいくつかの疑問が生じてきた。さらに、平成八年以後の人口や世帯数の急激な増加による混住化が進むなか、秋津野塾の活動への理解不足が生じている。上秋津の将来を見据えた活動のあり方が討議され、これからどのような活動をしていけばいいのかを改めて考える時期に来ているとの考えから、和歌山大学に「マスタープラン策定事業」を依頼することとなり、平成十五年九月に冊子が完成する予定である。

　秋津野塾ホームページ
　http://akizuno.net

引き算型まちづくりの事始め（九）

まちづくりと広報

広報とは、広く知らせること。まちづくりにとって広報が果たす役割は限りなく大きい。市町村で発行されるいくつかの広報、各種団体、コミュニティで取り組まれる機関紙、ニュースレターなど多様である。そして今の時代であれば、パソコンが普及し、ホームページを見れば知りたいものがたちどころにキャッチできる。が、まちづくり情報としてのそれは必ずしも十分とはいえない。まちづくり集団の中にいて、自分たちがやっていること、我が町のことについて、客観的な情報というのは以外と少ない。

それは、情報を発信する側の考え方、受信する側が求めるものに、本質の違いのようなものを感じるからである。どこがどう違うのか、引き算型まちづくりとして考える「広報」について、読者の皆さんと一緒に考えたい。

私自身が、経験として広報活動らしきものに携わったのは、若い頃の労働運動の中である。組合員と心を一つにするために苦労したのが、情報紙の発行である。夜の会議を終えてから自宅でガリ版に向かい、その日の内に会議で語られたことを要約して書き上げる。翌朝には謄写版で印刷して、全員に配布する。懐かしい思い出だ。四〇年も前のことだから、これを読まれる人たちにはピントこないかもしれない。今でこそこんなパワーはなくなったが、組織の元気や地域のそれを引き出すためには、欠かすことのできない大切な作業であり、今も変わることはない。

今はメディアの時代。新聞、テレビ、インターネット、雑誌、専門図書など不自由はしない。そんな中で、さらに力が入っているのが、全国ほとんどの自治体で発刊されている広報である。専任の広報担当者がいて、デジカメを片手に取材に走り、毎月のようにカラー刷りの美しい広報が発刊されている。広報の多くを見ているわけではないが、規模や質は千差万別、読みづらいほど分厚いものから、B5判の四ページ程度のものまで多様である。

長年公務員をやっていると、住民との懇談会や説明会に関わることは限りなく多い。そのたびに、よかれと思って参考文献などのコピーを参加者に配布するが、以外と読まれない。できれば参加者の中の一人でも二人でもよい、読んでくれることを期待するのだがうまくはいかないものである。むしろ情報が伝達しえない責任を住民に転嫁し、あれほど配付した資料を読まない住民が悪いとばかり、コピーを配ることで終わってしまう。皆さんにはこんな経験はないだろうか。

さらには、主催する行政側の考え方や価値観と、住民との間に隔たりがあり、読んでみたい関心が生まれないのかもしれない。広報には、PRとしての性格が強い。ある辞書には「企業、団体が社会の人々との関係をよくしようとする活動」とある。まちづくりの主体が行政である場合、行政が考えること、行政が計画していることを広く知らしめることになる。従って双方向にはならない。知らされたことに対する反論を表現する場は生まれることがない。

まちづくりは、PRばかりでは達成できない。関心が高いのは、住民自らの意見、自らの行動、自らの地域のことが、文字として情報化されたときである。「ああ、載っている」これを繰り返すことを通して住民に誇りが生まれ、参加意欲が芽生えるものである。よく「まちづくりは住民が主役」といわれるが、広報の中で主役としての表情を表現するのは、文章にしろ、写真にしろ容易ではない。編集者、編集スタッフの力量が広報の善し

悪しを決めてしまいそうである。

滋賀県高月町雨森地区のまちづくりは、あまりにも有名である。視察だけでも年間三万人を超えるという。花で飾った地域の景観は、地区住民の手が加わってあまりにも美しく、区民一人ひとりのつつましい参加の下でなせることである。このエネルギーのもとに「区報あめのもり」が果たした役割はあまりにも大きい。ここでの広報活動はことのほか素晴らしいものである。まねのできるものではない。昭和三七年に創刊された「区報あめのもり」が、ひととき休刊の時期があったらしいが、昭和五六年に六〇号から復刊させ、今では七五〇号に達しているとか。一度見せてもらったことがあるが、タブロイド版のしっかりしたもので、地区住民の笑顔や様々な表情豊かな写真で編集されたものであった。しかも週報である。公務なら月に一回や二回は発刊できても、区という自治会で発行するとなると容易なことではない。予算があってやるわけでもなく、ひたすら区民の心をまとめることを願ってのこと。もちろん編集発行の主役は、町役場に勤める平井茂彦さんである。

町役場に勤めているからといって公務でやっているわけではない。公務員に限らず、会社員だって、商社マンだって、技術者だって地域には住んでいる。そんな人たちがコミュニティを形成しているとすれば、誰だって二足の草鞋を履いて、片方の足は職場に、もう一方の足は地域に下ろして、職場で培ったノウハウを地域に生かす大切さを雨森地区は教えてくれる。

また、「区報あめのもり」は、広報としての機能、役割を小さい地域に限定して働かせているところにあるだろう。地域のことは地域で対応することが一番いい。まちが発行する広報ともなるとそうはいかない。どうしてもタテマエを優先させなければならず、公平でなければならず、かつマニュアル化させようとする。自ずと基準をこしらえてしまい、それを拠り所に広報事務が定着化し、マンネリ化してしまう。

自治体職員の地域における評判は必ずしもいいものではない。多く耳にする言葉は、付き合いが悪い、公務を理由に地域のことへの参加が鈍い。まだまだ心の隅に役人の意識が働いているのか。せめて平井さんのように、「広報のことは俺に任せろ」とばかり、アフターファイブをゴルフやパチンコに費やさず、地域のことに思いを馳せて欲しい。

市民オンブズマンができて十年。官官接待からカラ出張など、数々の不正が衆目にさらされた。当たり前のことである。こんなことが新聞を賑わす背景には、広報の本質に不十分さがあったがための結末かもしれない。広報の別な役割は、組織内の情報の開示から始まらなければならない。組織の中にいる人同士が情報を共有仕合い、この情報をまちづくり人に届けていかなければ、運動は進まない。

情報は、住民が行動を興そうとするときの判断材料である。広報は、単にお知らせではない。行政からすれば知らせたいもの、読ませたいものを基準にして編集されるのであろうが、読者である住民からすれば、読みたいもの、読みたくないものを選別して読んでいる。残念ながら情報に対する住民の反応はフィードバックされることはまずあり得ない。

もし、まちづくりを進める上で広報に限界を感じるのであれば、広報とは呼ばないもう一つの情報誌の発刊を考えたいものである。

内子町　**岡田　文淑**

ここにしかないものを売る

新宮村
霧の森・霧の高原
平野　俊己

果たしてこの「異国」の地で、いったいどんな仕事ができるのだろうか。

これは四年前に当地・新宮村に来たときの率直な感想である。神戸に育ち、京都、東京と転進してきた自分にとって、まさに新宮村は異国の地であった。

村の活性化の切り札として観光施設「霧の森」がオープンするにあたり、私はそのスタッフとして自ら東京から飛び込んで来たのである。しかし前職は編集者。観光施設の運営などはまったくの畑違いだった。異国の地で異色の仕事。まさに何から手をつけてよいかわからぬながらも希望に満ちた日々を送った。

だが、物見遊山の団体旅行があふれる時代では、すでになかった。折りしも不況のあおりを受け、ご他聞にもれず観光施設の運営はすぐに岐路に立たされた。

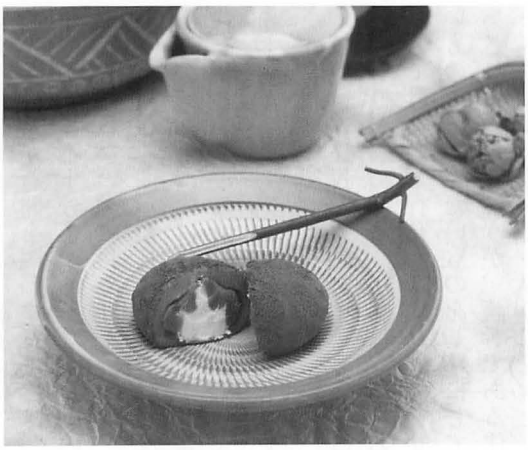
危機感を募らせた私は、施設内の工房に着目した。無農薬の新宮茶を使った菓子を製造する菓子工房、山の澄んだ水を使った豆腐を製造する豆富工房である。

これしかない。ここでしか作れないものを作って全国に売る。インターネットで事業展開すれば、山間であっても不利な点は何もない。むしろ安全な食品を求める都会の消費者に、清冽で実直な山村をダイレクトにアピールできる。霧の森に残されたラストチャンスにも思えた。

段階的に準備を進め、インターネットで「新宮村」を発信しつづけた。そして満を持して投入した菓子「霧の森大福」は瞬く間にインターネットの世界を登りつめ、今年四月、大手ショッピングサイトの売れ筋ランキングにおいて、全六十五万点の商品の頂点に立った。まさに天にも昇る心地を味わった瞬間であった。

ランキング首位のニュースがメディアで取り上げられるや、工房の商品を求めてわざわざ新宮村を訪ねて来られるお客様が増えた。工房商品の絶大な人気に支えられて、観光施設が再び歩みはじめることが可能となったのである。団体旅行が廃れたように「時代」に翻弄された感のあった霧の森ではあるが、代わってインターネットという距離・規模の概念を打ち消す利器が生まれ、その恩恵を最大限受けることができたことは、やはり「時代」によるところが大きい。

今、私はこの山に隔てられた「異国」の地で、都会とのさらなるランデブーの機会を作り出すべく、日夜インターネットに向かう。



ネットで首位に立った「霧の森大福」

温故知新

内海村
内海村青年団
寺岡　秀幸

今年の初めより約半年間、内海村史編纂に携った。歴史の知識があったわけではないが、内海村への強い思い・関心と行動力を担当者が買ってくれたのだ。おかげで、短い間ではあったが貴重な勉強ができ、より一層、我が村への関心が持てた。

極端な表現かもしれないが、村史にかかわるまでの私は「目の前には海があり後ろには山がある。海の色は青で山の色は緑」その程度の感覚で生活していたように思える。村史編纂で各地区の史跡を巡った。今でも守り受け継がれているものもあったが、中には忘れ去られて無くなってしまっているものもあった。祭りなどの行事もそうである。今に始まったわけではなく、仕方のないことであったのかもしれないが寂しく思う。今更ながら関心を持ち、深く調べようにもどうにもならないからだ。開発により破壊された自然などはなおさらである。必要な部分もあるが、やり過ぎは良くない。不便さを我慢してでも残さなければいけないものがあったのではないだろうか。景気の良いときに作られて、今では利用されることがなくなった道や建物を見るとそう思う。五十年程前の写真を見せてもらったが、なんとも見事な景観であった。今では白黒写真でしか見ることができず、当時の人が羨ましく思った。

あるテレビ番組で「現代を生きる私たちが、この地球をどうするか先代に問われ子孫に試されている」というようなことを言っていた。確かにこの地球の資源は今を生きる私達だけのものでは無いのである。小さな村でも、沢山の歴史があり犠牲もあったはずだ。そうして作り上げられてきたこの地域を、子孫により良い状態で引き継いでいかなくてはならないと思う。

いろいろと過去を批判的に書いてしまったが、今の時点で私が素直に感じたことなので許してほしい。これからも、もっといろいろな角度から地域を見つめ、町づくりをしていこうと思う。

「未来は学べないが過去は学べる。」

史跡や行事や自然は地域の歴史・文化・財産なのである。

（昭和19年当時）

（現　在）

柏秋祭りの四太鼓と御神輿

“MY TOWN„うぉっちんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第25弾

忽那七島鏝絵めぐり 中島町探訪記

岡崎　直司

松山沖に忽那七島と呼ばれる、魅惑的な島々が点在している。私は、日頃から、一度全てを巡ってみたい、という願望を持っていた。

念ずれば花開く、という大げさなものではないが、今回予てからの念願が叶った。行政区は中島町、トライアスロンで有名な島でもある。正確な忽那七島は、山口県の柱島が入るのだが、取りあえず愛媛側の六島を押さえた。松山市高浜沖に横たわる興居島の向こうに、東から野忽那島を手始めとして、睦月島、中島（本島）、怒和島、津和地島、少し南に二神島と連なる。その西の先はもう山口県で、東西に大きな屋代大島へとつながる。

単純な話だが、視点をこうして地図上で見渡してみて、初めて山口と愛媛、防予（ほうよ・周防と伊予）の関係性に気が付く。愛媛県中央部から、山口県東南部にかけて、まるでネックレスのように島々が連なり、見事な海廊を形成しているのだ。普段は、興居島の陰に隠れて、松山市側から見る限りにおいては、イメージが湧きづらい。

では、野忽那島から探訪を始めよう。忽那七島の最も東端に位置し、中でも小さなこの島は、昨年映画のロケ地となりいきなり脚光を浴びた。「船を降りたら彼女の島」である。この島の見晴らしのよい岡に登り、大杉漣、木村佳乃が好演をしていた。また、港のすぐ側に宇佐八幡神社があるが、県内に七箇所、町内に三箇所ある中の一つ。そして、ここの明治期の遍路絵馬は一見の価値がある。菅笠に、思い思いの旅装をした歩き遍路の一団は、今も色鮮やかである。

睦月島へ渡る。町内で最も過疎が進んだ島で、人口は往時の四分の一になっている。田中イシヨ家という家の室内に、面白い鏝絵がある、というので伺った。松本金丸氏という中島の左官が、昭和五十年代に描いた繊維壁の鏝絵「老松」（写真①）である。床の間の壁面一杯に見事な枝振りを見せている。この周辺は、浜側に長屋門が立ち並び、かなり空き家や改変されたりしているが、それでも前面の防潮石垣（写真②）などに繁栄の跡が見て取れる。大正から昭和三十年くらいまで、縞売りの行商が盛んとなり、その

①

③

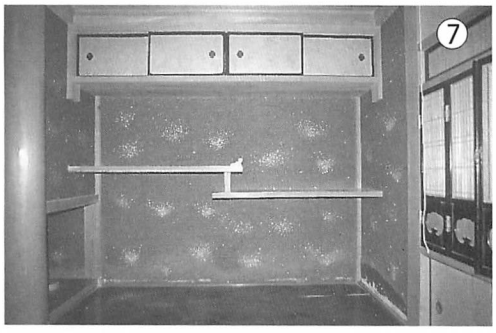
④

富の名残りであるらしい。

役場のある中島本島を経て怒和島へ渡る。元怒和に面白い倉庫を発見。その仲本家は、昭和四十五年に新築され、地元左官芝光雄氏による鏝絵「打出の小槌」が、玄関の妻壁に入れられている。興味を引かれた倉庫は、入り口にある長屋門の側にあり、こちらは昭和二十八年築とのこと。いわゆるミカン景気である。倉庫と大書された扉のブリキ板には、明らかにミカンのデザインが（写真③）。内部の棚の様子も写させてもらった（写真④）。

一方、同島の上怒和にある田中友子家には、「旭に鶴」（写真⑤）の鏝絵も。こちらは戦後間もなくの作で、松山から来た左官職人だとのこと。

歴史的にミステリアスな二神島に渡る。中世期と思しき五輪塔や、二神家文書の存在が、この島を不思議な魅力で覆っている。昭和四十七年頃、アメリカの「ナショナル・ジオグラフィック」誌に二十六ページにわたって紹介されたりもしたという。



この島にも鏝絵があった。竹内光一家の長屋門前に立つと、両脇で恵比寿と大黒の笑い顔が迎えてくれる（写真⑥）。座敷の床の間にも面白い仕掛けがあると聞き、拝見せていただいた。黒い砂壁に、アワビか何か、貝殻の粉を吹き付けてある（写真⑦）。キラキラと妖しく光り、昭和二十三年にこれを塗った左官・斉藤小太郎の職人魂をみる思いだ。

最後に一つ。中島本島の熊田にある家の「竹に虎」。これなど、県内の多くの鏝絵とは根本的にデザインが違う。山口・広島辺りの山陽路の影響であるのだろう。他にもご紹介したい魅力の数々を、山ほど見て回ったのだが、とても紙面を割くことが出来ない。このコーナーボリュームで、忽那七島を取り上げる愚に、やっとここで気が付いてしまった。

媛（ひめ）のかわら版

あかがね（銅）の里から

（その２）

新居浜市　社団法人 新居浜市観光協会
理事・事務局長　前原　和子

前回、あわただしくキーを叩いてから数ヶ月が経過しましたが、新居浜はとっても元気です。

おかげさまで当協会のサイトも無事立ち上がりました。是非お越しいただいて新居浜を楽しんでいただきたいと思います。（http://www.niihama.info/）目で楽しんだら、次は生の新居浜に触れて欲しいと思います。みなさんそれぞれの素晴らしい感性のままに。

夏が過ぎると新居浜はどことなくうきうきそわそわ…祭りの気配と興奮が日を追うごとに大きく熱くなっていきます。今年も一台、新しい太鼓台も誕生し、市内全域で四十八台の太鼓台が繰り出すことになります。

祭りのことになると、新居浜の人は別のモードのスイッチが入って、誰も彼もが太鼓台をまるで恋人のように、あるいはヒーローとして恋焦がれています。新居浜で生まれた人には、「太鼓ＤＮＡ」が埋め込まれていると言われていますが、まさに言い得て妙。

太鼓の音を聞くと目覚めてしまいます。十月十六～十八日の三日間はひたすら太鼓台と過ごす特別な濃厚な時間となります。担ぎ手も見物人も、心臓の鼓動までもが太鼓のリズムになっているのではと思えるから不思議です。

この祭りは画像や写真で見ても始まりません。内蔵を揺るがせる太鼓の重低音の響きや、高さ五・五メートル、重さ二・五トンを目の当たりにして、やっと新居浜太鼓祭りを語れるパスポートが手に入ります。今年の秋は是非、新居浜へおこしくださいませ。

さて、祭りとは別にもう一つの新居浜の元気人達をご紹介いたしましょう。

私は新居浜市観光協会のほかに、ボランティア団体「マイントピアを楽しく育てる会」の事務局長もさせていただいております。この会は文字通り、マイントピア別子を市民の貴重な財産として、自分達で知恵と力を出し合って、活性化するとともに、その過程をうんと楽しもうという趣旨を持っています。

現在、十二月～一月のイルミネーションの点灯・冬の桜まつり（マイントピアは冬桜が咲きます。）から始まり、別子銅山の歴史を踏まえた「炭焼き」の実施、親子炭焼き教室の開催、日曜・祝日等のボランティアガイド、さらに産業遺産の泉寿亭における月に一回の「おもてなしのお茶会（主に紅茶とお菓子）」等と元気な活動を続けています。

「炭焼き」は、マイントピアの施設内

に設けられた炭宿窯で、木炭や竹炭を焼くのですが、火の温度を見ながら夜通し窯につかなければならない過酷な作業も伴います。部会メンバーの努力の賜物で、年々いい炭が焼けるようになり、マイントピアでの販売にもつながりました。親子で炭焼き体験をしていただきながら、環境学習や歴史に触れていただくことも回を重ねて大きな成果になっています。

また、ボランティアガイド部会の方も、非常に学習熱心な人達が、素晴しい出会いをマイントピアで繰り広げてくれています。

私達のガイドには、マニュアルはなく、ガイドさんのありのままの言葉で別子銅山の歴史を語っていただいてます。

月に一回開催される新居浜市のガイド学習講座では毎回、専門家や研究者、さらには実際の関係者を講師に、質の高い講座を開催しています。

ガイドさんの職業も得意分野も様々で、個性溢れるガイドとなっています。例えば地質や岩石に詳しい方、歴史に詳しい方、技術的に詳しい方、人物に着目して歴史の中での意義を見出している方、建物に造詣の深い方、さらに実際に勤務されていた方など、多岐に渡っています。

そして「おもてなしのお茶会」は、昭和十二年に住友の接待館として建てられた産業遺産「泉寿亭（一部がマイントピアの芝生広場に移築）」を活用して、出会いの場を提供しています。大自然との出会い、歴史との出会い、人と人の出会い等々、いくつかの小さなドラマが生まれています。

冬のイベントとして定着してきた別子銅山の約三百年の歴史の終焉の地、マイントピアでのイルミネーションの点灯は、冬の暗闇の中に光の渓谷を生み出して、美しく輝いています。

白い息を吐きながらも見学に来てくれる方々が毎年増えています。十二月初めの点灯式もおかげさまでたくさんの人が参加してくださるようになりました。

私達のこの一連の活動には、新居浜市という力強いパートナーがいます。担当課の方々が時には汗を流し、またある時は市民に混じって共に活動してくれます。事務局長は頼りない私がぽつぽつとやらせていただいてますが、事務局は新居浜市商工観光課がど～んとサポートしてくださっており、本当の意味でのパートナーシップが醸成してきています。人間的な絆の中で、新たな歴史を共に創っているのです。

そして、それを感謝さえして支えてくれているのが、私達の活動のステージ、㈱マイントピア別子です。第3セクターの不調伝説を蹴っ飛ばして頑張ってます。

前向きのひたむきパワーがどんどん伝染していって、場所自体がプラスのパワーが渦巻く知恵と創造の場になっているのを痛烈に感じています。

でも、この話は新居浜の元気人達のほんの数パーセントを話したに過ぎません。ほんの一部をチラッとご紹介できただけです。

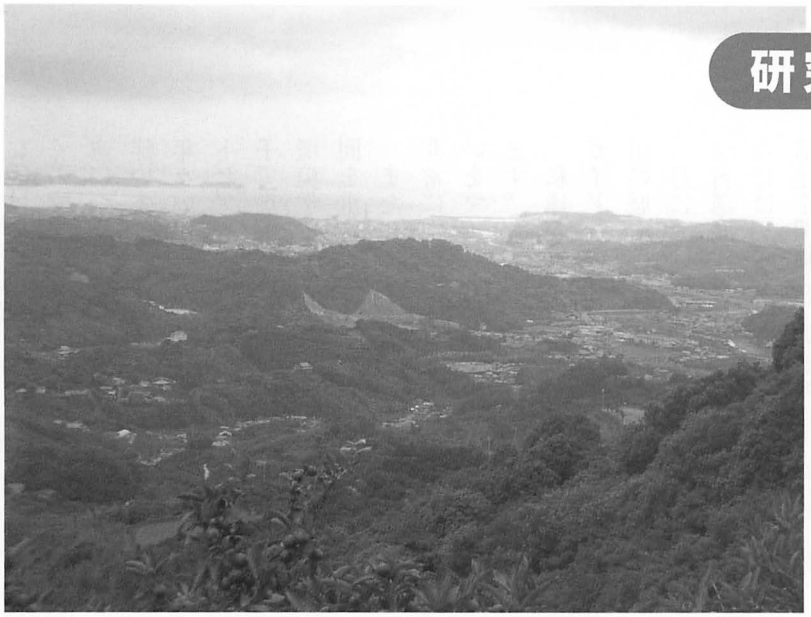
祭りが終わると木々が俄かに色づき始め、見事な紅葉が別子ラインから別子はな街道を染めていきます。

十一月の一・二日は、別子山との合併記念イベントが開催されます。市民と行政が力を合わせて、新生・新居浜市の魅力全開で皆々様に迫ります。

是非、秋のスケジュールはこのイベントに合わせて、一緒に楽しみませんか？熱い新居浜があなたのお越しをお待ちいたしております。

ということで、思いつくままにキーを打ってみましたが、私のおぼつかない文章よりも「百聞は一見に如かず」です。

また、どこかでお目にかかれますように。ありがとうございました。



研究員レポート

自立した上秋津の地域活動について

研究員　梅村　裕治

現在、市町村では、合併特例法適用の期限がせまり、枠組みの決まった市町村は合併協議会を中心に、合併に向けての準備作業をすすめている。市町村合併は国や地方財政を考えると避けては通れないものの、行政区域が広がることにより、地域住民の声は行政に届きにくくなるのではないか、と心配する声も聞かれていて、これからは、行政に頼らない住民主導による「自立した地域」が求められている。

そこで、今回、自立した地域づくりの先進地である和歌山県田辺市上秋津地区に訪問することにした。

上秋津地区の概要

田辺市上秋津地区は、十一集落からなる旧村で人口約三千人の地区であり、温暖な気候条件を生かした果樹栽培が盛んである。耕地面積の九十七％が果樹園であり温州みかんをはじめ、多種多様な柑橘類が栽培されている。また、平地の水田の転作地には、梅を主体に桃やすももなどが栽培されている。総世帯数は、九百九十戸でうち農家戸数は三百三戸と約三十％を占め、古くからみかんの産地として知られている。昭和四十年代に柑橘の価格暴落、生産調整で果樹経営、地域存続の岐路に立たされたが、青年農業者が中心となって優良品種の導入や完熟みかんのブランド化、柑橘の周年出荷に取り組み、価格暴落の危機を克服している。

むらづくりの特徴

今の時代、田舎といえども地域のコミュニティーが希薄になりつつある中で、上秋津地区は「みんなで話し合い合意形成を図る風土」が残っている。当地区は、明治の大水害で会津川が氾濫し、行方不明者三百二十人、家や田畑が流され、水田が二ｍの土砂で覆われた経験があり、復旧には長い年月と費用がかかったことを伺った。地域全体で災害復旧に取り組んだ経験から、みんなで地域を守り、良くしていこうとする風土が育まれている。

このような地域性があるから、秋津野村が昭和三十一年の旧村合併時に、上秋津地区の村有財産の処分について協議が行われた時も、議論の結果、「村有財産を将来の地域を支える子供たちのために使うべき」との提案がなされ、全住民の合意により昭和三十二年に、旧村有財産の運用、有効活用を図ることを目的に「社団法人上秋津愛郷会」が発足して、まちづくり活動への財政的な支援を行うに至っている。早くから地域づくりに取り組

み、地域の将来について考えられていることが当地区のまちづくりの基礎になっている。

また、この日お伺いした農村環境センターの建設においても前施設の公民館として使用されていた「愛郷会館」の老朽化に伴い、むらづくりの活動拠点となるような新しい多目的集会所が必要との認識が高まり、昭和四十八年に町内会長、愛郷会、などで建設促進委員会を設置して、委員会を中心に建設に向け検討が行われた。結局、完成したのは平成五年であったが、その間には何度となく話し合いがもたれ、検討されている。このように地域の課題に対して住民全体で話し合い合意形成を図りながら、地域への意識を高め住民指導のまちづくりが進められている。

上秋津農村環境センター

秋津野塾による組織の一体化

これまでは、町内会、農業組織、PTA組織など各組織がそれぞれに活動していたが、地区全体の合意形成を図りながら、より活発な村づくりを展開するために、全体を束ねる組織が必要との機運が高まり、平成六年に地区の全二十二団体（現在二十四）が集まり、秋津野塾が結成されている。秋津野塾は、町内会をはじめ、上秋津愛郷会など各組織の代表者から構成され、老若男女、農家・非農家にかかわらず、全住民の意見を幅広く反映できる組織体制となっている。そして、平成八年にはその活動が評価され農林水産祭むらづくり部門で「天皇杯」を受賞している。このことが活動への励みとなり、地域づくり活動への自信につながっている。

危機感を持った地域づくり

この上秋津地区の取り組みを熱く語っていただいたのが上秋津公民館長である玉井常貴さんである。そのお話の中で強く印象に残った言葉が、「何もしなければ地域は崩壊していくのではないだろうか、いつかは行政からの補助金もなくなるかもしれないから、今のうちに、補助金が貰えなくてもやっていけるシステムを作らなくてはならない。」と地区の将来について危機感を持ち自立への道を模索されている。どこの地域でも、少子高齢化による人口の減少、農産物の輸入等による農林水産業の衰退、経済不況による地場産業の衰退などの問題を抱えている。この状況で本当に危機感を持ち、住民と行政が協働して自分たちの地域をどう守っていくのか、地域への関心をどう高めていくのか、考えなければならない時期に来ていると思う。危機感を持ちがんばっている所と、そうでない所とでは、十年先、二十年先には、地域の存続にかかわるような差ができているかもしれない。自分の生まれ育った地域が、いつまでも元気で魅力ある所であるためには、危機意識を持ち地域が一つになって取り組むことの大切さを痛感した。それには、まず自分が本当の意味で危機感を持ち続けることだろう。この気持ちを忘れずに地域づくりに取り組んでいきたい。

地域イベントと地域振興

研究員　奥山　清司

今年九月一日～三日、㈶地域活性化センターが主催する地域イベント実務研修会（企画入門コース）に参加しました。

この研修会において、赤羽正嗣氏（地域マーケティング・コンサルタント）から、地域イベントは地域振興にどういう役割を持っているのかについて多くのことを学ぶことができたのでお知らせいたします。（左下図「地域イベントの位置づけ」）参照

まず地域振興、地域活性化とは、そこに住んでいる住民（生活者）と行政および企業とが最も快適に融合し、好ましいコミュニティを築いていくため、その地域があるべき確固たる共通の目標（地域のアイデンティティ＝地域の魅力・地域個性化目標）を設定し、その目標に向かって地域を見直し、都市の再開発をしていこうとする活動を指しています。

地域振興計画の策定に当たっては、地域の魅力づくり、個性化・独自性（地域CI＝地域アイデンティティ）づくりに向けた取り組みとの連動は欠かせず、官民が一体となった地域のイメージづくりが必要になってきます。自分達の地域をどんな地域にしたいのか、その方向性を定めていくことが大切であり、個性豊かな地域の創造とそれを実現するためのコンセプトを基に地域振興計画を実施することが必要です。地域イベントにおいても、ここでは地域振興に繋がっていくための手段として行っているわけで地域CIは欠かせない要素となっています。

また、地域振興を支える基盤として、地域経営も大変重要になってきています。地域社会全体で「地域を経営」する時代であることを認識したうえで、地域内外の様々な資源（農林畜産物、自然資源、文化資源、人的資源、固有技術等々）を効果的に組み合せて、顧客の求める新しい価値（商品やサービス）を作り出し、それを顧客に買ってもらったり、あるいは利用してもらって、利益を得、その利益を住民、農家、地域振興へ還元、波及させることで、さらに開発が進み、改革と成長の循環が生まれてくるようになります。そのためには地域マーケティングの導入や、それを進めていく人材を育成していくことがポイントとなり、地域イベントはそういった中での重要な位置づけにもなっています。

この図でいう地域活性化活動とはイベントで地域を奮い起こす、盛んにすることを目的とした活動として捉えることを前提としており、それが地域経営・地域マーケティングの展開に繋がってくるものとなっています。その展開の中で、「地域づくり活動」とは、地域の内部体制を固める内部的な活動であり、自分たちが最も住みよい環境づくり、地域の資源（財産）＝人、文化、コミュニティの充実、産業・経済基盤の充実と捉えています。

一方「地域おこし活動」とは、地域の内部活動エネルギーを外部に向ける活動であり、特産品の開発とその流通、資源の有効活用と製品化、観光資源の開発と情報発信、都市との交流による交流人口の獲得、地域の総合PR活動体制の確立と捉えています。こういった地域づくり、地域おこしの総合戦略としてもイベント

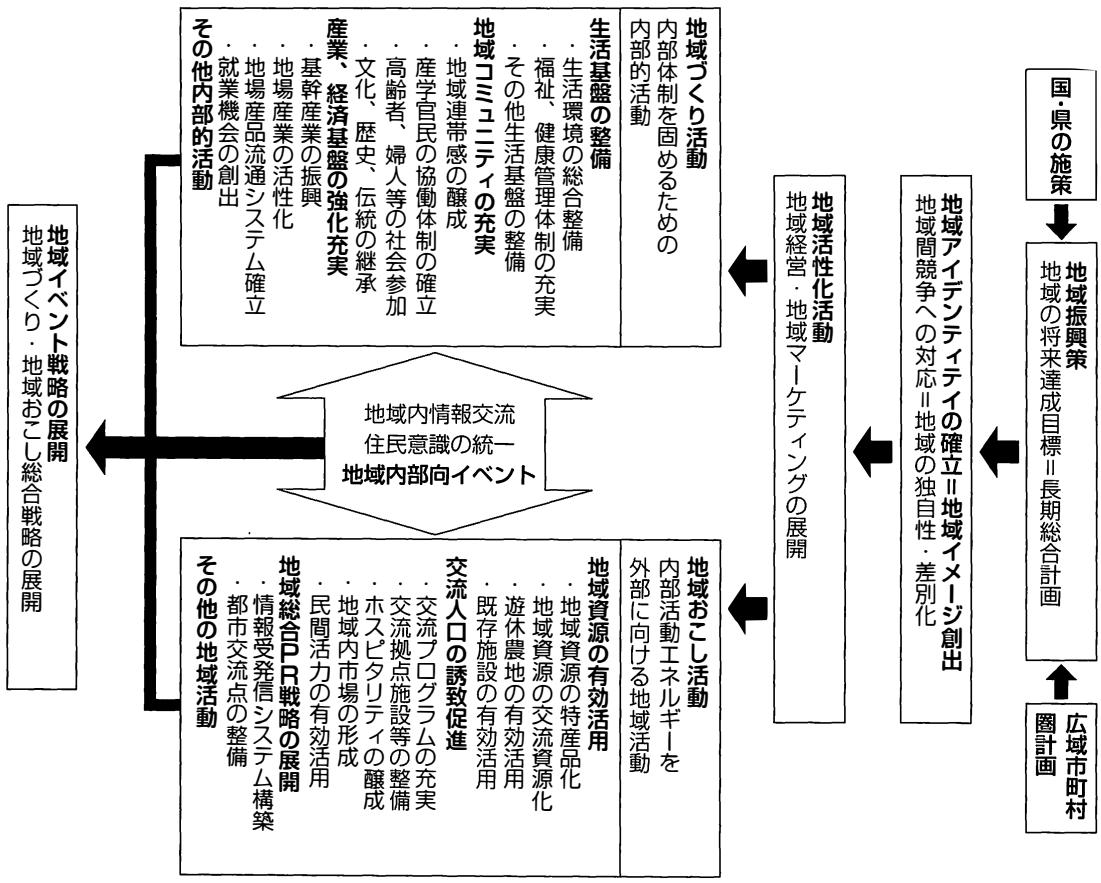
は有力な手段であるとしています。

この講義を通じて、イベントには、それに取り組む人々が、何故イベントなのか、どのような目標を持ち、どのような効果を期待するのか、また、地域振興にどのように連動させていくのかといったしっかりとした理念が不可欠であること。また、地域イベントは、あくまでも、手段であって成功すればそれでよいというものではないこと。そして地域イベントとは、同時に「こと」の始まりとすることが大切であり、新たな地域振興への起爆剤となる要素を含んでいることが分かりました。

地域イベントは地域住民が主役となって考えていくべきです。また、リーダーの存在と、そのリーダーが十分働くことが出来るような人材配置と、組織づくりも地域住民全体で支えていくことが必要だと考えます。

そのためにも、これからは地域の魅力を情報発信、交流人口の獲得等といった外向けのイベントをするだけではなく、内向けのイベントとして、地域住民のコミュニケーションと意思統一を図ることがより必要になってくるものだと感じています。

参考図表・地域振興と地域イベントの位置づけ



（第17回地域イベント実務研修会〈企画入門コース〉資料より抜粋）

道の駅『みま』
コスモス館
三　間　町

秋になると町中にコスモスが咲き誇る三間町に、新しい交流施設道の駅『みま』コスモス館が7月19日にオープンしました。このコスモス館には、三間米や朝採れ野菜などの農産物や健康・自然・いやしをテーマにした商品を販売するコーナーがあるのはもちろん、同町出身の日本を代表する版画家畦地梅太郎氏の作品約300点を所蔵しアトリエを再現した記念美術館と、井関農機の創始者井関邦三郎氏の功績を紹介した記念館が併設してあるのが特徴です。

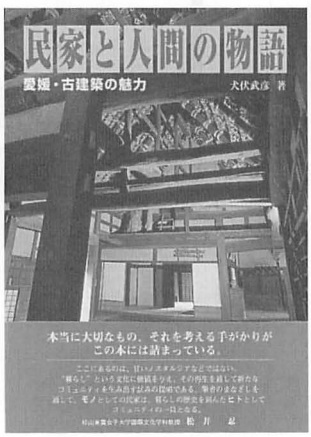
また、地元の女性グループが地元の食材を使った「おふくろの味」をバイキング形式で提供するレストランや格闘技「K－1」のグッズ販売コーナーなどもあります。

この秋には、11月2日に「コスモス祭り」、11月16日に「鬼北収穫祭」などの楽しいイベントも開かれ、ドライブに持って来いです。

道の駅『みま』コスモス館へ秋を感じにいらしてください。

《営業時間》　午前9時～午後6時
《休　館　日》　毎週火曜日
《問い合わせ》　みま産業振興公社　ＴＥＬ０８９５－５８－１１２２

● **『民家と人間の物語』**
犬伏武彦著　愛媛新聞社　1900円（税別）



本書でも取り上げられている庚申庵（松山市味酒町）や土居家（野村町惣川）などの復元修復に当たられ、今年、当センターが発行した「愛媛温故紀行」の執筆者の一人でもある著者が、愛媛にもまだ数多く残っている古建築物の魅力を、豊富な写真と図面に加えて、復元にまつわるエピソードを交えて綴った一冊。

「忘れられた出来事、歴史、人間…。その土地にしかないものを見つめること」

それは地方に生きる人間だからこその喜びであり、そして「人間の物語」を醸し出す建築を次代に伝える責任も強く思うのである。（「序」より）

Information センターからのお知らせ

地域課題研究サロン「近代化遺産の活用とまちづくり」開催

（財）えひめ地域政策研究センターでは、愛媛県からの委託を受け、平成１３年度及び１４年度において「愛媛県近代化遺産等総合調査」を行いました。県内各地に残る近代化遺産について、地域の人たちにもっとその存在を知っていただくとともに、その再評価と活用についての検討を通じて、今後のまちづくりに役立てていただこうと考えています。

そこで、地域課題研究サロン「近代化遺産の活用とまちづくり」を開催し、まずは地域の近代化遺産を知り、再評価することの大切さとまちづくりに活用する方法を参加者のみなさんで探っていこうと思います。

■と　　き：**平成１５年１１月８日（土）　１３：００～１７：００**

■と　こ　ろ：**リジェール松山**（松山市南堀端町　農協会館）

■プログラム：○調査の概要とスライド説明

岡崎　直司（元えひめ地域政策研究センター主任調査員）

○現地見学（松山市内の近代化遺産、伊予鉄道関係等）

○意見交換

■問い合わせ・申し込み　㈶えひめ地域政策研究センター　まちづくり活動部門

ＴＥＬ０８９－９３２－７７５０（担当：橋岡、山下）

BOOK　INFORMATION

●**『走れ、坊ちゃん列車』**

中村英利子著　アトラス出版　1200円（税別）

『坊ちゃん列車物語』

西井　　健著　アトラス出版　952円（税別）

明治21年から昭和29年まで、長く人々に愛され、親しまれてきた「坊ちゃん列車」にまつわる２冊の本が、今夏、アトラス出版から相次いで出版された。

前者は、その誕生から廃止、復活に至るまでの歴史を紹介しているほか、巻末では、多くの写真により廃線跡や沿線の観光スポットを取り上げて、読者を小さな旅へと誘ってくれる。

また、後者は、敗戦の年から廃止となる前年の昭和28年まで、機関助手を務めた著者が、松山弁で語る心温まるエピソードは、見事に当時の世相を描き出している。

お知らせ（財団法人 愛媛県市町村振興協会）

『オータムジャンボ宝くじの賞金は、1等・前後賞合わせて2億円』

1等 1億5,000万円×20本　前後賞各 2,500万円　2等 1,000万円×20本　3等 100万円×200本

冒頭でも触れたように、少子高齢化社会の到来を迎え、本号「論談」で執筆いただいた甲斐先生の言われるように、「高齢者が生きと暮らせる社会」の構築が求められています。

そのためには、介護・福祉の対象としての高齢者という視点とともに、社会資源としての高齢者という視点も必要となっており、これら両方の視点に立った地域づくりが、高齢者はもちろん、それ以外の人たちにとっても暮らしやすい社会の構築に繋がるものと思います。

こうした流れの中で、今回の集で取り上げた方々のような先駆的な活動が、これから県内各地に拡がっていくことを期待して止みません。（山下）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階
(財)えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動スタッフ
TEL089(932)7750
FAX089(932)7760

発行／平成十五年十月一日
(財)えひめ地域政策研究センター
印刷／三創印刷株式会社

☆http://www.ecpr.or.jp　☆E-mail:info @ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。